

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02525

研究課題名（和文）総合的な学習の時間における「深い学び」を実現する教師の育成プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Teacher Training Program for "Deep Learning" in the Period for Integrated Studies.

研究代表者

藤上 真弓（FUJIKAMI, MAYUMI）

山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：40737566

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、複数領域の研究者が協働し、総合的な学習の時間の授業を担う教師に求められる資質・能力を整理し、それらの構造表を開発した。また、総合的な学習の時間で目指すべき「深い学び」を定義付けるとともに、「深い学び」と「レスポンスビリティ」、「協働」の関係について整理した。さらに、先進実践において、どのような目的で「協働」が仕組まれていたのか分析した。これらの研究を基盤として、総合的な学習の時間を「深い学び」に誘うために必要な「協働」について定義し、「協働」を見取る視点と目指すべき「協働」が具現化された教室談話とそこに向かう段階について提案し、それらを活用したツールや研修プログラムを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義は次の2点である。第一に、開発・提案した総合的な学習の時間の授業づくりを行う上で教師に必要な資質・能力とそれらの構造表は、研修プログラムの構築にとって指針的なものになり、教師教育に貢献できるものになっている点が挙げられる。第二に、総合的な学習の時間において目指すべき「深い学び」とそれを生み出すために重要な役割を果たす「協働」について、子どもの姿（身に付ける資質・能力、子どもが発する言葉等）として具体化し、教師が実践につないでいくための手がかりを得るものとして提案できている点が挙げられる。この2点は、今求められる資質・能力を育成する総合的な学習の時間の充実につながると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, researchers in multiple fields collaborated to investigate the qualities and abilities that are required of teachers when they are teaching the Period for Integrated Studies. A structural table was devised to show these qualities and abilities. We also propose a definition for the "deep learning" that should be the goal for the Period for Integrated Studies, and we define the relationship between "deep learning", "responsibility", and "collaboration". In addition, we analyze the objectives for which "collaboration" is orchestrated in advanced practices. Based on this research, we propose a definition for the "collaboration" which is necessary to induce "deep learning" in the Period for Integrated Studies. We also propose a perspective from which "collaboration" can be viewed and the steps that can be taken towards achieving a classroom discourse which can enable the realization of "collaboration". Finally, we developed tools and training programs based in our proposals.

研究分野：教科教育学および初等中等教育学

キーワード：総合的な学習の時間 深い学び 協働 教室談話 教員養成 研修プログラム

1. 研究開始当初の背景

総合的な学習の時間は、社会の変化に主体的に対応できる「生きる力」を育成するために、平成14(2002)年度から順次本格実施されて今に至る。OECDの「PISA2015年協同問題解決能力調査」において日本が2位であったことは、総合的な学習の時間において問題解決能力を育む課題探究型の学習に取り組んだ成果であると評価されている。村川ら(2015)の全国的な調査においても、総合的な学習の時間の研究を積極的に実施し一定の評価を得ている学校の子どもは、「質の高い思考力・情報活用能力」「協同的な問題解決能力」「地域へ貢献しようとする意欲」「新しい社会的課題へ挑戦する意欲」が顕著であることが報告されており、総合的な学習の時間が果たす役割が注目されている。しかしながら、教師・学校・地域・校種の間での取組の格差が顕著であるとの課題も指摘されている。

村井(2017)は「総合的な学習の展開における課題と解決についての考察」において、総合的な学習の時間の成否のいずれにおいても「裁量の大きさ」がその要因となっていると指摘している。また、総合的な学習の時間で求められる「深い学び」を生み出す探究的な学習のプロセスは、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総合的な学習の時間編』では「物事の本質を探ってみ極めようとする一連の知的営み」(文部科学省、2018)と定義され、この定義の抽象度の高さも授業実践の壁となっている。村井(2017)の研究では、総合的な学習の時間に対して否定的(あまり好きではない・全く好きではない)な群の教員は、授業の進め方や指導方法がわからないことや教材研究の時間不足に負担を感じている。一方で、総合的な学習の時間の学習指導に対して『得意でない』といった意識を抱く教師は多いが、総合的な学習の時間を好きだと意識している教師も多く、『得意』と『好き』には相関関係がないことが示唆されている。この傾向は若手教員の間で顕著である。すなわち、得意となる手がかりを得る場や実践の手応えを感じる省察の場が必要であり、特に若手教員に対する研修が強く求められている。また、総合的な学習の時間の授業の質的向上には、「深い学び」の本質を理解することが欠かせないが、それを学ぶ機会が十分に提供されているとは言い難い。これらのことから、若手から段階的に総合的な学習の時間に関わる体系的で「深い学び」に焦点化した研修プログラムの開発が強く求められている。

2. 研究の目的

本研究では、以下の4点の実現を目的とした。

- (A) 総合的な学習の時間の授業づくりを行う上で、教師が身に付けるべき資質・能力について整理する。
- (B) (A)で整理した資質・能力に基づいて、教員研修や教員養成に活用できる『「深い学び」を実現する総合的な学習の時間の授業力向上プログラム』を開発し、試行・効果検証をする。
- (C) 子どもの学習意欲、姿勢、身に付ける資質・能力等の側面から総合的な学習の時間における「深い学び」について整理・分析し、「深い学び」の構成要素を明らかにする。
- (D) 授業づくりや授業実践、及び、授業研究等で活用できるような、子ども同士の関わりの深さ、思考の深まりや探究の深まり等をとらえる総合的な学習の時間における「深い学び」をとらえるためのツールを開発する。

3. 研究の方法

研究の目的(A)から(D)を達成するために、以下のような研究の方法を用いた。

- (A) 総合的な学習の時間の授業づくりをする上で教師が身に付ける資質・能力に関わる先行研究の中でも、実践者たちが自分たちの経験や小学校現場の実践上の課題をもとに語り合いながら導き出すという手法で構想された資質・能力と、小学校教師を対象として総合的な学習の時間における力量についてのアンケート調査を行い、実証的に導き出された資質・能力に着目する。このような異なる手続きや視点から導き出された先行研究を踏まえて、総合的な学習の時間を担う教師に求められる資質・能力について整理を行う。
- (B) (A)で整理した資質・能力に基づいて、総合的な学習の時間に対して肯定的な見方・考え方をもっている若手小学校教師と教職志望学生を対象にして、総合的な学習の時間における授業力向上をねらった研修プログラムを実施する。事前事後にアンケート調査を実施し、研究対象者の意識の変容をとらえて研修プログラムの成果検証をするとともに、研究対象者の授業づくりをする上での着眼点や研修内容の求め等について把握し、若手小学校教師と教職志望学生が総合的な学習の時間の授業づくりをする際に抱えている課題について明らかにする。
- (C) 総合的な学習の時間において目指すべき「深い学び」について、関連研究をもとに定義する。次に、子どもたちが学び合う仲間とともに、どのように課題に向き合っているのかということが「深い学び」の創出に影響すると予想し、「深い学び」と「協働」の関係性について検討する。さらに、理論的検討をもとに導き出した総合的な学習の時間における「深い学び」の定義に照らし合わせながら、総合的な学習の時間の先進実践において目指され

てきた、一単位時間のゴールとそれを具現化した子どもの姿を抽出する。抽出したデータを、目的や向き合う対象等に着目して分類し、今後も目指すべき総合的な学習の時間の一単位時間の授業のゴールにおいて現れる子どもの姿を具体的に明示する。

- (D) 総合的な学習の時間における「深い学び」の創出には「協働」が影響すると予想し、総合的な学習の時間における「協働」の質をとらえる視点を開発していく。その際、視点とは、教師の授業力で不足している部分を顕在化させ、その自覚を促すチェックリストのようなものではなく、これからの取組に向けての方向性を見いだすことができ、授業づくり・授業改善の原動力となることを企図していく。そのためにも、子どもたちが、質の高い協働の姿を表出させながら、共に課題解決に向かう学びを展開できるようになるためには、どのような段階を経るのかということについても明らかにしていく。

4. 研究成果

(1) 総合的な学習の時間を担う教師に必要な資質・能力の提案

総合的な学習の時間は、今日子どもたちに求められる資質・能力を育成するために重要な位置づけを与えられながらも、教師間格差や研修機会の欠如といった多くの課題を抱えていることが指摘され続けている。本研究ではまず、先行研究の精査を通して、そのような状況にある総合的な学習の時間を担う教師に必要な資質・能力を明らかにすることを試みた。とりわけ村井(2015, 2016, 2017)や「みらいの会」(2009)の研究の比較検討からそれぞれの課題を浮かび上げさせ、より教育実践や研修プログラムの構築にとって指針的なものとなるような具体的な資質・能力の構造表を開発・提案した。大分類としては、「カリキュラム・マネジメント力」「単元デザイン力」「課題設定力」「環境デザイン力」「状況把握・対応力」「評価力」の6つの資質・能力を導出し、それらの具体的な資質・能力についても提案した。

(2) 若手教師や教職志望学生が総合的な学習の時間に対して抱える課題についての整理

総合的な学習の時間に対して肯定群の教職志望学生と若手教師を対象にした研修プログラムとアンケート調査を通して、肯定群であったが、以下のような悩みや不安、課題を抱えていることが明らかになった。

- ・「カリキュラム・マネジメント力」「単元設定力」「課題設定力」に関する悩みや不安を抱えている割合が高い。
- ・「カリキュラム・マネジメント力」に関しては、研修直前も研修プログラム後も悩みや求めが大きく、積極的に今後の研修プログラムに取り入れる必要がある。
- ・「課題設定力」は、研修プログラムを通して解決したことも増えているが、直前の不安や悩みも大きく、もっと学びたいこととしての回答数も多いことから、積極的に研修プログラムに取り入れる必要がある。
- ・「課題設定力」や「環境デザイン力」は、1回の研修ですぐに身に付く資質・能力ではない。
- ・「解決した」けれど「もっと学びたい」と考えている資質・能力も複数あり、資質・能力を身に付ける必要性について「理解する(分かる)」段階と「実践につなぐ(できる)」段階には段差があるのではないかと。また、その段差も資質・能力によって異なるのではないかと。
- ・教職志望学生や若手小学校教師は、「評価力」に関するものをあまり意識していない。
- ・教職志望学生と若手小学校教師が意識する資質・能力への意識が偏っていたため、キャリア形成の段階、総合的な学習の時間の実践を積んだ年数や研修機会の差によって、意識し、獲得しようとする資質・能力には段階があるのではないかと。
- ・総合的な学習の時間の学習対象もデザインも多様にあるため、多くの実践事例にふれる研修に対する求めも大きいのではないかと。

(3) 総合的な学習の時間における「深い学び」の定義

これまでの総合的な学習の時間を巡る議論や近年の学習論の知見をふまえ、総合的な学習の時間で目指す「深い学び」の特質を整理し、その定義付けを行った。とりわけ、教育心理学や教育学において1970年代から注目されてきた「ディープラーニング」の概念と文部科学省が考える「深い学び」の比較を通して、「ディープラーニング」と総合的な学習の時間は、どちらも真正の課題と子どもが向き合い、それらの課題解決に関与することで、自己肯定感や自己有能感を得ていくという類似性を有していることが明らかになった。また、総合的な学習の時間において重要視されてきた「レスポンスビリティ」の概念は、総合的な学習の時間の学びのあり方と関連付けて学術的に検討されてきていないため、「レスポンスビリティ」と「深い学び」の関係をとらえていった。そうする中で、総合的な学習の時間で具現化する子どもの姿を現す鍵となる概念には、「自分ごと」「折り合い」「手応え」も付加されることを導出した。加えて、今後より予測困難で不確実、複雑で曖昧な時代になると予測される中で求められる資質・能力を検討し、改めて「レスポンスビリティ」の重要性を位置付けた。

本研究では、総合的な学習の時間における「深い学び」とは、「①真正な課題の中にある答えなき問いを自分ごととして引き受け、多様な他者や状況等との折り合いを付け、レスポンスビリティを果たしていくために必要な資質・能力を身に付けていくことを保証する学び」「②問いの解決に自己関与することによって得た手応えをもとにして、社会に自分の居場所を見いだしたり、さらなる課題解決に向かう意欲をもったりすることにつながる学び」と定義付けた。

(4) 総合的な学習の時間における「深い学び」と「協働」の関係性

溝上(2020)の「深い学び」の必要条件をもとに、総合的な学習の時間における書く「外化」と話す「外化」についての比較検討をし、「深い学び」を成立させるためには、「書くこと」や「話すこと」といった外化の活動が重要となることを示し、こうした外化においては他者の存在や「協働」が成立条件となることが明らかになった。また、学習における他者との「協働」の重要性については、これまでも理論的・実践的に認識されてきた。本研究では、こうした議論の蓄積に学びながら、「協働」の具体的な姿や構成要素について検討した。

(5) 先進実践において目指されてきた1単位時間のゴールにおいて現れる子どもの姿の抽出と、目指すべき子どもの姿の具体化

総合的な学習の時間の先行実践において、「レスポンスビリティ」を果たす子どもの育成を目指していくために、「協働」を通して、どのような子どもの姿にたどり着くことをねらい、1単位時間の授業が行われてきたのかについて検討した。その検討を通して、総合的な学習の時間における「協働」は、「概念」と「方略」の高度化を目指して設定され、「概念の高度化」は「対象や課題に対する概念」「自分や自分のあり方に対する概念」の高度化、「方略の高度化」は「対象や課題の本質への迫り方」「対象(人)や仲間との向き合い方」の高度化に分けられることが明らかになった。さらに、これら4つの高度化において現れる目指すべき子どもの姿について具体的に示し、提案した。

(6) 総合的な学習の時間における「協働」の質をとらえる視点の開発

教師が総合的な学習の時間における学びの様相を談話に着目して顕在化しながら、目指す姿の具現化に受けた授業改善の方向性を探る手がかりとなる、「協働」の質をとらえる視点を開発した。具体的には、秋田(2012)や石井(2004)、Mercer(2008)等の教室談話や会話のタイプ等に関わる先行研究、総合的な学習の時間における「協働」を通して目指すゴールに関わる藤上(2023)の研究、『OECD Learning Compass Concept Notes』で示された主なコンピテンシー等を整理・分析し、「総合」における「協働」の質を「つながる」「共に見極める・創造する」という2つの視点からとらえていく必要があることを導出した。また、総合的な学習の時間において目指していきたいモデルを子どもの姿で表し、その姿が具現化した教室談話を目指すべき最終段階として、本質的な「協働」に向かうまでの談話を「第1段階目：無目的」「第2段階目：プレゼンテーション的」「第3段階目：協働的」「第4段階目：協働」として整理した。さらに、「協働」の質をとらえる2つの視点をそれぞれ具体化し、子どもの具体的な姿とともに提案した。

表1 総合的な学習の時間における「協働」の質をとらえる視点

つながる		共に見極める・創造する	
視点	視点の定義	視点	視点の定義
①双方向性	双方向的な関わりが生まれる表現を用いている	A独創性	自分たちで新たな考えや方法等を生み出そうとしている
②共通性・差異性	自他の考えの共通点や相違点を意識して意見を述べている	B柔軟性	自分の考えにこだわるだけでなく柔軟性ももち、課題解決にふさわしい考えを取り入れようとしている
③共感性・誠実性	仲間の思いや願い、考え等に共感する反応を示したり、仲間の思いや願い、興味・関心等に寄り添いながら提案や反論をしたりしている	C主体性	自分たちにとって関わりが深い課題であることを意識し、自分たちの力で課題解決しようとしている
④論理性	自分の考えを整理して、論理的に説明している	D整合性	課題解決の視点や方法等に矛盾が生じないように、目的を意識し、整合性をとしている
⑤具体性	伝える相手や内容に応じた具体例を挙げている	E鋭角性	議論を焦点化し、深く掘り下げて検討しようとしている
		F広角性	幅広い可能性を視野に入れ、多様な視点から検討しようとしている
		G方向性	仲間でも共有できた点とそうでない点、浮かび上がった課題を明らかにし、追求の方向性を探っている
		H調和性	互いの持ち味や考え等を生かしながら、仲間や現実との折り合いを付け、最適解を導出しようとしている

<引用文献・参考文献>

- ①秋田喜代美、『学びの心理学 授業をデザインする』、左右社、2012、p. 23、p. 71、pp. 71-72、p. 82、pp. 82-84
- ②石井順治、『学び合う学びが生まれるとき』、世織書房、2004、p. 25
- ③白井俊、『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力

- とカリキュラムー』、ミネルヴァ書房、2020、pp.146-147
- ④野口徹、「『みらいの会』において論議された課題」、田村学・嶋野道弘編著、みらいの会、『これからの生活・総合～知識基盤社会における能力の育成と求められる教師力』、東洋館出版社、2009、p. 27
 - ⑤藤上真弓、「総合的な学習の時間に求められる『深い学び』に関する研究』—『レスポンスビリティ』を果たす学びの具体化—」、山口大学大学院東アジア研究科『東アジア研究』21号、2023、pp.23-49
 - ⑥溝上慎一、「<大会シンポジウム:多様な学び方が生きる「深い学び」>個性化教育の観点から「深い学び」を拡張する」、日本授業UD学会編集委員会、『日本授業UD研究』、第9号、2020、p. 36
 - ⑦村井万寿夫、「総合的な学習の展開を阻害する要因についての検討(1)」、『金沢星稜大学人間科学研究』、第8巻2号、2015、pp.23-28
 - ⑧村井万寿夫、「総合的な学習の時間における教師の力量に対する自己意識についての考察」、『教育メディア研究』、Vol.22No2、2016、pp.13-19
 - ⑨村井万寿夫、「総合的な学習の時間の展開における課題と解決についての考察～小学校教師を対象とした意識調査を手がかりに～」、博士論文、明星大学、2017、p. 56
 - ⑩村川雅弘・久野弘幸・野口徹・三島晃陽・四カ所清隆・加藤智・田村学、「総合的な学習で育まれる学力とカリキュラム I(小学校編)」、日本生活科・総合的な学習教育学会、『せいかつか&そうごう』、第22号、2015、pp.12-21
 - ⑪文部科学省、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総合的な学習の時間編』、東洋館出版社、2018、p. 9
 - ⑫和田信行、「教師に求められる力」、田村学・嶋野道弘編著、みらいの会、『これからの生活・総合～知識基盤社会における能力の育成と求められる教師力』、東洋館出版社、2009、p.114、p.116、p.118
 - ⑬Neil Mercer、「Three kinds of talk.」、『Thinking Together Resources』、University of Cambridge、2008、https://thinkingtogether.educ.cam.ac.uk/resources/5_examples_of_talk_in_groups.pdf

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 藤上真弓、徳永真衣、大塚進真、志賀直美、久保田大貴、浦田敏明、前田昌平、佐伯英人	4. 巻 56
2. 論文標題 生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための附属学校教員と大学教員の協働体制の構築（その2）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓、志賀直美	4. 巻 56
2. 論文標題 生活科がキャリア教育に果たす役割についての研究：小学校第1学年の実践に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 189-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 57
2. 論文標題 山口大学教育学部附属光小学校における総合的な学習の時間「しおさい」創設期の実践の動向	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 131-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 57
2. 論文標題 総合的な学習の時間における質の高い協働で用いられる言葉の具体化－分かり合おうとするために必要な言葉に着目して－	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 141-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 No.130
2. 論文標題 リレー論説「学びをつむぐ生活・総合の授業の総合」今求められる資質・能力を身に付ける生活科・総合的な学習の時間の「振り返り」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 生活・総合の探究	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 21
2. 論文標題 総合的な学習の時間に求められる「深い学び」に関する研究 「レスポンスビリティ」を果たす学びの具体化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学大学院東アジア研究科『東アジア研究』	6. 最初と最後の頁 23-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 72
2. 論文標題 総合的な学習の時間における協働の質をとらえる視点の開発	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学教育学部論叢	6. 最初と最後の頁 77-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 55
2. 論文標題 総合的な学習の時間における協働の質をとらえる視点の活用	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓・大塚進真・佐伯英人	4. 巻 54
2. 論文標題 総合的な学習の時間の授業改善に向けた「授業リフレクション」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 263-272
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 71
2. 論文標題 児童期・生徒期からの小学校教員に向けた教職キャリア形成に向けた教職キャリア形成の筋道：予期的社会化の視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 103-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 樋口裕介・高木啓・熊井将太・吉田茂孝・北川剛司・山岸知幸	4. 巻 71
2. 論文標題 ICT活用に関わる指導力の変遷と今日的課題 教育方法学テキストの分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 145-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 19
2. 論文標題 総合的な学習の時間を担う教師に求められる資質・能力に関する研究—教職志望学生・若手教師を対象とした研修プログラムの実践から—	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学大学院東アジア研究科『東アジア研究』	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤上真弓
2. 発表標題 総合的な学習の時間における協働の質をとらえる視点の開発
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 徳永真衣、藤上真弓
2. 発表標題 エージェンシーを発揮する生活科の学び
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大塚進真、藤上真弓
2. 発表標題 エージェンシーを発揮する子どもの育成－責任を譲渡する総合的な学習の時間の実践を通して－
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤上真弓
2. 発表標題 総合的な学習の時間における協働を見取る視点の活用に向けて
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 藤上真弓
2. 発表標題 総合的な学習の時間に求められる「深い学び」に関する研究
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤上真弓
2. 発表標題 総合的な学習の時間を担う教師に求められる資質・能力の育成に関する研究
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 山本木ノ実、植田和也、金網知征、松岡敬興、藤上真弓、毛利猛、清水顕人、笹屋孝允、柗澤利也、岡静子、日下哲也、池西郁広、佐々木啓祐	4. 発行年 2024年
2. 出版社 美巧社	5. 総ページ数 180
3. 書名 子どもたちが育つ学級経営ー安全な居場所づくりのためにー第二版	

1. 著者名 ジョン・ロックラン、武田信子、草原和博、齋藤真宏、大坂遊、渡邊巧、西田めぐみ、岡田了祐、斉藤仁一朗、村井大、山内敏男、大西慎、内田千春、岡村美由規、祝迫直子、前元功太郎、山本佳代子、河原洸亮、宮本勇一、粟谷好子、石川照子、西村豊、深見智一、両角遼平、泉村靖治、大杉昭英、霜川正幸他	4. 発行年 2024年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 306
3. 書名 セルフスタディを実践する 教師教育者による研究と専門性開発のために	

1. 著者名 湯浅恭正・今井理恵・上森さくら・福田敦志・星川佳加・宮原順寛・樋口裕介・谷口和美・黒谷和志・高橋英児・高木啓・吉田茂孝・清水紀子・新井英靖・北川剛司・熊井将太・竹内元	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 子どもとつくる教育方法の展開	

1. 著者名 諸富祥彦・黒沢幸子・神村栄一・土田雄一・石田ちかり・松田憲子・長坂正文・玉木敦・石橋瑞穂・坂本千代・小柴孝子・渡辺友香・金子英利・山本木ノ実・霜川正幸・長野実・白井利明・勝田拓真・嶋崎政男・和井田節子・藤原寛・磯邊聡・田中康雄	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 163
3. 書名 速解チャート付き 教師とSCのための カウンセリング・テクニク4 保護者とのよい関係を積極的につくるカウンセリング (速解チャート付き教師とSCのためのカウンセリング・テクニク)	

1. 著者名 Nariakira Yoshida, Hirotaka Sugita, Shota Kumai, and Atsushi Fukuda	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 219
3. 書名 Lesson study-based teacher education : the potential of the Japanese approach in global settings	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鷹岡 亮 (TAKAOKA RYO) (10293135)	山口大学・教育学部・教授 (15501)	
研究分担者	熊井 将太 (KUMAI SHOTA) (30634381)	山口大学・教育学部・准教授 (15501)	変更：安田女子大学 2023年4月1日

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中田 充 (NAKATA MITSURU) (60304466)	山口大学・教育学部・教授 (15501)	
研究分担者	霜川 正幸 (SHIMOKAWA MASAYUKI) (80437615)	山口大学・教育学部・教授（特命） (15501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関